

寸情風土記

泉鏡花作

全一章

金澤かなざはの正月しげつは、お買初めかひぞ、お買初めかひぞの景氣けいきの好いい
聲こゑにてはじまる。初買はつがひなり。二日かの夜中よなかより出立いでたつ。
元日くわんじつは何なんの商賣しやうばいも皆休みなやすむ。初買はつがひの時とき、競きそつて紅鯛べにだひと
縁起えんぎものを買かふ。笹ささの葉はに、大判おほばん、小判こばん、打出うちでの
小槌こづち、寶珠ほうじゆなど、就中なかつちう、緋ひに染色そめいろの大鯛おほだひ小鯛こだひを給付むすびつ
くるによつて名なあり。お酉とりさま様の熊手くまで、初卯はつうの繭玉まゆだまの
意氣いきなり。北國ほくこくゆゑ正月しげつはいつも雪ゆきなり。雪ゆきの中なかを
此この紅鯛べにだひ綺麗きれいなり。此このお買初めかひぞの、雪ゆきの眞夜中まよなか、
うつくしき灯ひに、新版しんぱんの繪草紙ゑくさうしを母ははに買かつてもらひ
嬉うれしさ、忘れ難わすし。

おなじく二日かの夜よ、町まちの名なを言いひて、初湯はつゆを呼よん
で歩あるく風俗ふうぞく以前いぜんありたり、今いまもあるべし。たとへば、
本町ほんちやうの風呂屋ふろやぢや、湯ゆが沸わいた、湯ゆがわいた、と此こ
のぐあひなり。これが半纏はんてん向むかうはち卷まきの威勢ゐせいの好いい
のでなく、古合羽ふるがつぱに足駄あした穿はき懐手ふたてして、のそり／＼

と歩ある行きながら呼よぶゆゑをかし。金澤かなざはばかりかと思おもひしに、久須美くすみ佐渡守さどのかみの著あす、(浪華なにはの風かぜ)と云いふものを讀よめば、昔むかし、大阪おほさかに此このことありー二日かは曉あけな七なつ時前ときまへより市中しちうほら螺らなど吹ふいて、わいたわいたと大聲おほしゑに呼よびあるきて湯ゆのわきたるをふれ知らず、江戸えどには無なきことなりーとあり。

氏神うぢがみの祭禮さいらいは、四五月頃くわいごころと、九、十月頃くわじうごころと、春秋しゆんじう二度どづゝあり、小兒こどもは大喜おほよろこびなり。秋あきの祭まつりの方ほう賑にぎし。祇園ぎをん囃子ばやし、獅子ししなど出いづるは皆みな秋あきの祭まつりなり。子供こどもたちは、手てに手てに太鼓たいこの撥ばちを用よう意いして、社やしろの境内けいだいに備そなへつけの大太鼓おほたいこをたゝきに行ゆき、また車くるまのつきたる黒塗くろぬりの臺だいにのせて此これを曳ひきながら打うち囃はやして市中しちうを練ねりまはる。ドンガドン。こりや、と合あひの手てに囃はやす。わつしよい／＼と云いふ處ところなり。

祭まつりの時ときのお小遣こづかいを飴買あめかひ錢ぜにと云いふ。飴あめが立たてものにて、鍋なべにて暖あためたるを、麻あさ殻がらの軸ちくにくるりと巻まいて賣うる。飴買あめかつて麻あさやるか、と言いふべろんのことばあり。饅頭まんぢう買かつて皮かやるかなり。御祝儀ごしうぎ、心こゝろづけなど、輕少けいせうの儀ぎを、此これは、ほんの飴買あめかひ錢ぜに。

金澤にて錢百と云ふは五厘なり、二百が一錢、十錢が二貫なり。たゞし、一圓を二圓とは云はず。

蒲鉾の事をはべん、はべんをふかしと言ふ。即ち紅白のはべんなり。皆板についたまゝを半月に揃へて鉢肴に装る。逢ひたさに用なき門を二度三度、と言ふ心意氣にて、ソツと白壁、黒塀にでついて通るものを、「あいつ板附はべん」と言ふ酒落あり、古い酒落なるべし。

お汁の實の少ないのを、百間堀に霰と言ふ。田螺と思つたら目球だと、同じ格なり。百間堀は城の堀にて、意氣も不意氣も、身投の多き、晝も淋しき所なりしが、埋立てたれば今はなし。電車が通る。満員だらう。心中したのがうるさかりなむ。

春雨のしめやかに、謎を一つ。――何枚衣ものを重ねても、お役にたつは膚ばかり、何？・・・
たけのこ 筍。

然るべき民謡集の中に、金澤の童謡を記して

(鳶のおしろに鷹匠が居る、あつち向いて見さい、こつち向いて見さい) としたるは可きが、おしろに註して(お城)としたには吃驚なり。おしろは後のなまりと知るべし。此の類あまたあり。茸狩りの唄に、(松み、松み、親に孝行なもんに當れ。) 此の松みに又註して、松茸とあり。飛んだ間違なり。金澤にて言ふ松みは初茸なり。此の茸は、松美しく草淺き所にあれば子供にも獲らるべし。(つくしん坊めつかりこ) ぐらゐな子供に、何處だつて松茸は取れはしない。一體童謡を収録するのに、なまりを正したり、當推量の注釋は大の禁物なり。

鬼ごつこの時、鬼ぎめの唄に、・・・(あてこに、こてこに、いけの縁に茶碗を置いて、危いとぢやつた。) 同じ民謡集に、此のいけに(池)の字を當てゝあり。あの土地にて言ふいけは井戸なり。井戸のふちに茶碗ゆゑ、けんのんなるべし。(かしゃ、かなざもの、しんたてまつる云々) これは北海道の僻地の俚謡なり。其處には、金澤の多人數、移住したるゆゑ、故郷にて、(加州金澤

の新豎町の云々）と云ふのが、次第になまりて
（かしゃ、かなざものしんたてまつる。）知るべ
し、民謡に註の愈々不可なること。

新豎町、犀川の岸にあり。こゝに珍しき町の名に、
大衆免、木の新保、柿の木畠、油車、目細小路、四
這坂。例の公園に上る坂を尻垂坂は何うした事？
母衣町は、十二階邊と言ふ意味に通ひしが今は然ら
ざる也。一六斗林は筍が名物。目黒の秋刀魚の儀
にあらざ、實際の筍なり。百々女木町も字に似ず音
強し。

買物にゆきて買ふ方が、（こんね）で、店の
返事が（やあ／＼。） 歸る時、買った方で、有
がたう存じます、は君子なり。一ほめるのかい一
いゝえ。

地震めつたになし。しかし、其のぐら／＼と来る
時は、家々に老若男女、聲を立て、世なほし、世
なほし、世なほしと唱ふ。何とも陰氣にて薄氣味悪
し。雷の時、雷山へ行け、地震は海へ行けと唱ふ、

たゞし地震の時には唱へず。

火事をみて、火事のことを、あゝ火事が行く、火事が行く、と叫ぶなり。彌次馬が駈けながら、互に聲を合はせて、左、左、左、左、左、左。

夏のはじめに、よく蝦蟆賣りの聲を聞く。蝦蟆や、蝦蟆い、と呼ぶ。又此の蝦蟆賣りに限りて、十二、四五位なのが、きまつて二人連れにて歩くなり。よつて怪しからぬ二人連を、畜生、蝦蟆賣め、と言ふ。たゞし蝦蟆は赤蛙なり。蝦蟆や、蝦蟆い。――そのあとから山男のやうな小父さんが、柳の蟲は要らんかあ、柳の蟲は要らんかあ。

鯖を、鯖や三番叟、とすてきに威勢よく賣る、おや／＼、初鯉の勢だよ。鯛は五月を季とす。さし網鯛とて、砂のまゝ、筈、盤臺にころがる。嘘にあらず、鯖、鯛ほどの大さし。これを焼いて二十食つた、酢にして十食つたと云ふ男だて澤山なり。次手に、目刺なし。大小いづれも串を用ゐず、乾したるは干鯛といふ。土地にて、いなだは生魚にあらず、鰯を

開きたる乾ものなり。夏中の好下物、盆の贈答に用
うる事、東京に於けるお歳暮の鮭の如し。然ればそ
の頃は、町々、辻々を、彼方からも、いなだ一枚、
此方からも、いなだ一枚。

灘の銘酒、白鶴を、白鶴と読み、いる盛をいる盛
と讀む。む娘盛を娘盛だと、お嬢さんのお酌にきこ
える。

南瓜を、かぼちやとも、勿論南瓜とも言はず皆ぼ
ぶら。眞桑を、美濃瓜。奈良漬にする浅瓜を、堅瓜、
此の堅瓜味よし。

蓑の外に、ばんどりとして似たものあり、蓑よりは
此の方を多く用ふ。磯一峯が、(こし地紀行) に
安宅の浦を一里左に見つゝ、と言ふ處にて、

(大國のしるしにや、道廣くして車を並べつべし、
周道如砥とかや言ひけん、毛詩の言葉まで思ひ出で
らる。並木の松巖しく聯りて、枝をつらね蔭を重ね
たり。往來の民、長き草にて蓑をねんごろに造りて
目馴れぬ姿なり。)

と言ひしはこれなるべし。あゝ又雨ぞやと云ふ事を、又ばんどりぞやと云ふ習ひあり。

祭禮の雨を、ばんどり祭と稱ふ。だんどりが違つて子供は弱る。

關取、ばんどり、おねばとり、と拍子にかゝつた言あり。負けずまふは、大雨にて、重湯のやうに腰が立たぬと云ふ後言なるべし。

いつぞや、同國の人の許にて、何かの話の時、鉢前のバケツにあり合せたる雑巾をさして、其の人、金澤で何んと言つたか覚えてあるかと問ふ。忘れたり。ぢぶきなり、其の人、長火鉢を、此れはと又問ふ。忘れたり。大和風呂なり。さて酔ばらひの事を何んと言つたつけ。二人とも忘れて、沙汰なし／＼。

内證の情婦のことを、おきせんと言ふ。たしか近松の心中ものゝ何かに、おきせんとて此の言葉ありたり。どの淨瑠璃かしらべたけれど、おきせんも無

いのに面倒なり。

眞夏、日盛りの炎天を、門天心太と賣る聲きはめてよし。静にして、あはれに、可懐し。荷も涼しく、松の青葉を天秤にかけて荷ふ。いゝ聲にて、長く引いて静に呼び來る。もんでん、こゝろウぶとウー

續いて、荻、萩の上葉をや渡るらんと思ふは、孟蘭盆の切籠賣の聲なり。青竹の長棹にづらりと燈籠、切籠を結びつけたるを肩にかけ、二ツ三ツは手に提げながら、細くとほるふしにて、切籠り行燈切籠ーと賣る、町の遠くよりきこゆるぞかし。

氷々、雪の氷と、こも俵に包みて賣り歩くは雪をかこへるものなり。鋸にてザク／＼と切つて寄越す。日盛に、町を呼びあるくは、女や兒たちの小遣取り。夜店のさかり場にては、究竟な若い者が、お祭騒ぎにて賣る。土地の俳優の白粉の顔にて出た事あり。屋根より高い大行燈を立て、白雪の山を積み、臺の上に立つて、やあ、がばり／＼がばり／＼と喚く。行燈にも、白山氷がばり／＼と遣る。はじめ、

がばり／＼は雪の安賣に限りしなるが、次第に何事にも用ゐられて、投賣、棄賣り、見切賣りの場合となると、瀬戸物屋、呉服店、札をたてゝ、がばり／＼。愚案ずるに、がばりは雪を切る音なるべし。

水玉草を賣る、涼し。

夜店に、大道にて、鱧を割き、串にさし、付焼にして賣るを關東焼とて行はる。蒲焼の意味なるべし。

四萬六千日は八月なり。さしもの暑さも、此の夜のころ、觀音の山より涼しき風そよ／＼と訪づるゝ、可懐し。

唐黍を焼く香立つ也。

秋は茸こそ面白けれ。松茸、初茸、木茸、岩茸、占地いろ／＼、千本占地、小倉占地、一本占地、榎茸、針茸、舞茸、毒ありとても紅茸は紅に、黄茸は黄に、白に紫に、坊主茸、饅頭茸、烏茸、鳶茸、灰茸など、本草にも食鑑にも御免蒙りたる恐ろしき茸にも、一つ一つ名をつけて、籠に装り、籠に狩る。茸

爺ぢい、茸きのこ媪いひはとも名なづくべき茸きのこ狩がりの古ふる狸たぬき。町内ちやうないに一人ひとり位らゐづゝ必かならずあり。山入やまいりの先達せんたつなり。

芝茸しばたけと稱とへて、笠薄樺かさうすかばに、裏白うらじろなる、小ちひさな茸きのこが、山やま近く谷たに淺あさきあたりにも群生ぐんせいして、子供こどもにも就中なかんづくこれが容易たやすき獲えものなるべし。毒どくなし。味あじもまた佳よし。宇都宮うつのみやにてこの茸掃きのこはくほどあり。誰たれも食しよくする者ものなかりしが、金澤かなざはの人の行ゆきて、此これは結構けつこうと豆腐とうふの汁じゆにしてつるノと賞玩しやうわんしてより、同地どうちにても盛さかんに取とり用もちうるやうになりて、それまで名なの無なかりしを金かな澤茸ざはたけと稱しゆうする由よし。實説じつせつなり。

茹栗ゆでくり、焼栗やきくり、可懷なつかし。酸漿ほづきは然さることなれど、丹たん波栗はくりと聞きけば、里遠さとゝほく、山遙やまほるかに、仙境せんきやうの土産みやげの如ごとく幼心おほこころに思おもひしが。

松蟲まつむしや　　ー　　すゞ蟲むし、と莫蔭こざさきて、菅笠すががさかむりたる男をとこ、籠かごを背せに、大おほきな鳥とりの羽はねを手てにして山やまより出いづ。

こつ、さいりん、しんかとして柴しばをかつぎて、姉あねさん被かぶ

りにしたる村里の女房、娘の、朝疾く町に出づる状は、京の花賣の風情なるべし。六ツ七ツ茸を薄に抜きとめて、手すさみに持てるも風情あり。

渡鳥、小雀、山雀、四十雀、五十雀、目白、菊いたゞき、あとりを多く耳にす。椋鳥少し。鶉最も多し。

じぶと云ふ料理あり。だししたぢに、慈姑、生麸、松露など取合はせ、魚鳥をうどんの粉にまぶして煮込み、山葵を吸口にしたるもの。近頃頻々として金澤に旅行する人々、皆その調味を賞す。

蕪の鮓とて、鰯の甘鹽を、蕪に挟み、麴に漬けて壓しならしたる、いろどりに、小鰈を紅く散らしたるもの。此ればかりは、紅葉先生一方ならず賞めたまひき。たゞし、四時常にあるにあらず、年の暮に霰に漬けて、早春の御馳走なり。

さて、つまみ菜、ちがへ菜、そろへ菜、たばね菜と、大根のうる抜き葉、露も次第に繁きにつけて、

朝寒、夕寒、やゝ寒、肌寒、夜寒となる。其のたば
ね菜の頃ともなれば、大根の根、葉ともに霜白し、
其の味辛し、然も潔し。

北國は天高くして馬瘦せたらずや。

大根曳きは、家々の行事なり。此れよりさき、軒
につりて干したる大根を臺所に曳きて澤庵に壓すを
言ふ。今日は誰の家の大根曳きだよ、など言ふな
り。軒に干したる日は、時雨颯と暗くかゝりしが、
曳く頃は霽、霰とこそなれ。冷たさ然こそ、東京に
て恰もお葉洗と言ふ頃なり。夜は風呂ふき、早や炬
燵こひしきまとゐに、夏泳いだ河童の、暗く化けて、
豆腐買ふ沙汰がはじまる。

小著の中に、

其の雲が時雨れゝて、終日終夜降り續くこ
と二日三日、山陰に小さな青い月の影を見る暁方、
ばらゝと初霰。さて世が變つた様に晴れ上つて、
晝になると、寒さが身に沁みて、市中五萬軒、後馳
せの分も、やゝ冬構へなし果つる。やがて、とこと

はの闇となり、雲は墨の上に漆を重ね、月も星も包み果て、時々風が荒れ立つても、其の一片の動くとも見えぬ。恚て天に雪催が調ふと、矢玉の音たゆる時なく、丑、寅、辰、巳、刻々に修羅磔を打かけて、霰々、又玉霰。

としたるもの、拙けれども殆ど實境也。

化すのは狐、化けるのは狸、貉。狐狸より貉の化ける話多し。

三冬を蛻すれば、天狗恐ろし。北海の荒磯、金石、大野の濱、轟々と鳴りとゞろく音、夜毎襖に響く。雪深くふと寂寞たる時、不思議なる笛太鼓、鼓の音あり、山嵐にのつてトントンヒューときこゆるかと思れば、忽ち颯と遠く成る。天狗のお囃子と云ふ。能樂の常に盛なる國なればなるべし。本所の狸囃子と、遠き縁者と聞く。

豆の餅、草餅、砂糖餅、昆布を切込みたるなど色々、の餅を搗き、一番あとの臼をトンと搗く時、千貫萬貫、萬々貫と哄と喝采して、恚て市は榮ゆるなりけ

り。

榧かやの實み、澁しぶく侘わびし。子供こどものふだんには、大抵たいてい柑子かうじなり。蜜柑みかんたつとし。輪切わぎりにして鉢はちものゝ料理れうりにつけ合あはせる。淺草あさくさ海苔さいのりを一枚まいづゝ賣うる。

上丸じやうまる、上々丸じやうじやうまるなど稱となへて胡桃くるみいつもあり。一寸煎ちよつとつて、飴あめにて煮にる、これは甘うまい。

蓮根はす、蓮根はすとは言いはず、蓮根れんこんとばかり稱となふ、味あじよし、柔ちよひかにして東京とうきやうの所謂いはゆる餅蓮根もちはすなり。郊外かうくわいは南北なんぼく凡およそ皆蓮池みなはすいけにて、花開はなひらく時とき、紅々こうく白々はくく。

木槿むくげ、木槿はちすにても相分あひわからず、木槿もくでなり。山やまの芋いもと自然生しねんじやうを、分わけて別々べつべつに稱となふ。

凧たこ、皆みないかとのみ言いふ。扇あふぎの地紙形ちがみがたに、兩方りやうほうに袂たもとをふくらましたる形かたち、大々だいだい小々せうせういろゝあり。いづれも金きん、銀ぎん、青あを、紺こんにて、圓まるく星ほしを飾かざりたり。關東くわんとうの凧たこはなきにあらず、名なづけて升ます凧いと言いへり。

地形ちけいの四角かくなる所ところ、即ち榧形ますがたなり。

女の子、どうかすると十六七の妙齡なるも、自分の事を夕アと言ふ。男の兒は、ワシは蓋しつい通りか。たゞし友達が呼び出すのに、ワシは居るか、と言ふ。此の方はどつちもワシなり。

お螻殿を、佛さん蟲、馬追蟲を、鳴聲でスイチヨと呼ぶ。鹽買蜻蛉、味噌買蜻蛉、考證に及ばず、色合を以て子供衆は御存じならん。おはぐる蜻蛉を、姉さんとなぼ、草葉螟蟲は燈心となぼ、目高をカンタと言ふ。

螢、淺野川の上流を、小立野に上る、鶴間谷と言ふ所、今は知らず、凄いほど多く、暗夜には螢の中に人の姿を見るばかりなりき。

清水を清水。ー 桂清水で手拭ひろた、と唄ふ。山中の湯女の後朝なまめかし。其の清水まで客を送りたるものゝよし。

二百十日の落水に、鯉、鮒、鯰を掬はんとて、何處の町内も、若い衆は、田圃々々へ總出で騒ぐ。子

供たち、二百十日と言へば、鮎、カンタをしやくふ
ものと覺えたほどなり。

謎また一つ。六角堂に小僧一人、お参りがあつて
扉が開く、何？・・・酸漿。

味噌の小買をするは、質をおくほど恥辱だと言ふ
風俗なりし筈なり。豆府を切つて半挺、小半挺とて
賣る。菘蕪は豆府屋につきものと知り給ふべし。お
なじ荷の中に菘蕪キツトあり。

蕎麥、お汁粉等、一寸入ると、一ぜんでは濟まず。
二ぜんは當前。だまつて食べて居れば、あとからノ
ノつきつけ装り出す習慣あり。古風淳朴なり。たゞ
し二百が一錢と言ふ勘定にはあらず、心すべし。

ふと思出したれば、鄰國富山にて、團扇を賣る珍
しき呼聲を、こゝに記す。

團扇やア、大團扇。

うちは、かつきツさん。

いつきツさん。團扇うちはやあ。

もの知りだね。

ところで藝者げいしやは、娼妓おやまは？・・・おやま、尾山おやまと申すは、金澤かなざはの古稱こしよつにして、在方鄰國ざいかたりんこくの人達ひとたちは今も城下じやうかに出づる事ことを、尾山おやまにゆくと申すことなり。何なに、その尾山おやまぢやあない？・・・そんな事ことは、知らない、知らない。

【完】